NEW CROWN　授業実践事例

BOOK 2　LESSON 4　授業例②

T.D. 先生

指導計画表
（全 10 時間）

時間	学習内容・主な活動
1	■とびら ・デジタル教科書の動画鑑賞と問いかけによる生徒の興味のかき立て ■GET Part 1 ・デジタル教科書と「手作り教科書 Step 1」による単元導入 ・語句・表現の導入 ・本文・ポイントの導入 ・ドリル，プラクティス ・ワード コーナー ・生活班による群読発表と生徒同志の評価
2	■GET Part 1 ・「手作り教科書 Step 2」による本文書き写しと和訳で振り返り
3	■GET Part 2 ・デジタル教科書と「手作り教科書 Step 1」による単元導入 ・語句・表現の導入 ・本文・ポイントの導入 ・ドリル，プラクティス ・ワード コーナー ・生活班による群読発表と生徒同志の評価
4	■GET Part 2 ・「手作り教科書 Step 2」による本文書き写しと和訳で振り返り

時間	学習内容・主な活動
5	■USE Read（前半） ・デジタル教科書と「手作り教科書 Step 1」による単元導入 ・プリーリーディング ・語句・表現の導入 ・本文の導入 ・インーリーディング ・生活班による群読発表と生徒同志の評価
6	■USE Read（前半） ・「手作り教科書 Step 2」による本文書き写しと和訳で振り返り
7	■USE Read（後半） ・デジタル教科書と「手作り教科書 Step 1」による単元導入 ・語句・表現の導入 ・本文の導入 ・ポストーリーディング ・トライ ・生活班による群読発表と生徒同志の評価
8	■USE Read（後半） ・「手作り教科書 Step 2」による本文書き写しと和訳で振り返り
9	■USE Listen ■USE Write
10	■We're Talking 4 ※ワークの宿題でまとめ

実践例

暗唱発表を中心とした授業
―デジタル教科書と「手作り教科書」の併用―

1.　外国語学習における母国語の言語獲得応用の理論的背景

1992 年，MIT を訪れた私は，ノーム・チョムスキーの同大学での功労を称えた受賞講演に出席しました。理論文法講座で，以前からお世話になっていた慶應大学院（当時）の大津由紀雄教授が司会で，質疑応答では，直接，チョムスキー教授に私からの二つの質問に答えていただき，たいへん感銘を受けました。大津先生には，その後も 2005 年 8 月 3 日に東京都教職員研修センター主催の慶應義塾大学言語文化研究所での大学公開講座「学習指導」でたいへんお世話になりました。

母語は，生得文法を通じ，親から愛情を受けて，授けられる一方，外国語は，生徒が教師から学習活動を通して習得します。母語の言語獲得においては，幼少期に音韻・統語規則をすべて獲得してしまいますが，中学校で教わるような基礎的な外国語の文法項目もその域をでません。例えば，大津教授が示すのを待つまでもなく，どの言語においても受動態などは幼少期に獲得されます。言語獲得が外国語学習に応用されるべき所以なのです。

また，実際の言葉は，有限な語彙と有限な文法ルールから無限の文を生み出すような数学的な側面もある一方，何度も使われているうちに，ある決まった言い回しが熟語のように定着してしまうというようなコロケーション（collocation）の側面もあります。これら二つの側面の間には，厳密に線を引けるようなものではなく，当然ながらコロケーションも文法規則の掌の上にあります。そういったことを知らない初級の学習者は，よく，自分のネイティブ言語の文を辞書などで逐語訳しただけで，外国語では通じない言い回しを作文してしまうことがあります。

2.　コア・イメージによる文法の習得

実際の授業では，演繹的なアプローチで文法用語を振り回しても，ほとんどの生徒には理解されず，反対に，単に多数の例文を挙げて機能的な文法習得を狙っても，不完全な文法認識に終わるというジレンマに陥ります。

そこで，幼児の一瞬の言語獲得を可能にする生得文法のような，だれもがピンとくるコア·イメージの提示が必要とされます。例えば，前置詞の'on'は「上」でなく「接触」です。また，中 1 で習う進行相の現在分詞と中 3 で習う後置修飾は全く同じもので，どちらも形容詞的（adjectival）であるし，wh 語の働きは，中 1 で習う疑問詞においても，中 3 で習う関係代名詞においても，代名詞的（pronominal）であるという具合です。

ここでは，学習者に心理的実在性（psychological reality）を引き起こす適度な意味のまとまりをチャンク（chunk）と呼び，言語学習で口癖になるぐらいリズムをつけて口ずさむことを（chants）と呼び，言語学習におけるチャンクやチャンツの重要性を提唱したいと思います。外国語の教科書学習においては，いわゆる本文などの暗唱です。

ある数学の先生によると，日本人は風呂を通して数学の基礎が授受されていたそうです。例の「いーちい，にい，さあん，しい，…」です。今，日本の折紙を初等教育に導入したり，九九よりも大きな数までチャンツすることを当たり前とするインドの技術者に現在日本のコンピューター会社が頼っている現実があります。

前述したように，基本例文が頭に入っていないような生徒が，テストのときに作文しても非文法的なものを書いてしまうことが多い一方，自由に表現できる人ほど，ほかの人よりもたくさんの基本表現や例文が頭の中にストックされているのです。そこで，この頃感じるのは，語学の教師として，一番大切な能力の一つが，生徒にピンとくるような例文を必要に応じていつでも挙げられることではないかと。

3.　発表を中心にパターン化された単元学習の流れ

1986 年から 1988 年の 2 年間, 米国のウィスコンシン州立大学マジソン校で，助手として週に 5 時間，初級日本語を教えた経験によると，教科書の本文を暗唱させた上，定期的に書かせる課題を学生に課していっただけで，驚くことに，1 年後にはほとんどの生徒が日本語を話したり，基本的な漢字を使って日本語の文が書けるようになりました。

そこで，この暗唱をさせる授業を自分なりに，中学校の英語の授業に取り入れて授業を組み立てると，それぞれの単元は，パターン化された展開になります。LESSON 4 を例に具体的に紹介します。まず, Part 1 と Part 2 に分かれている本文はそのまま使えますが，USE Read は長すぎるのでページ毎の二つの Unit に分け本文を使います。それぞれのユニットが次の流れになります。

①デジタル教科書と「手作り教科書 Step 1」を使った語彙・表現・本文・ポイントの導入と練習

①'生活班（1 クラス 6 班）による暗唱群読と互いの評価

②「手作り教科書 Step 2」を使った本文和訳による振り返り

デジタル教科書と 2 種類の「手作り教科書」を併用することによって，テレビやラジオの語学番組のように語学の授業をパターン化することができます。それによる最大の利点は，何より，生徒にまったくフラストレーションを与えることなく，英語だけで授業をすることが可能なことです。

日本の教室では，ALT 同伴の授業でないとなかなか雰囲気作りができず，日本語を使わざるをえないのも現実ではありますが，研究授業をやる機会の多い私は，そのような場では，必ず英語だけの授業を心がけております。そのような場で，いつ英語だけの授業をしても，生徒は「手作り教科書 Step 1」を参照すれば，単語や文の意味も発音も分かるし，授業の流れるもやるべきこともわかっているので，まったく支障がありません。

4.　4 課の文法ポイントのコア・イメージの例

4 課の文法ポイントは，存在文と動名詞ですが，教科書 38 ページのポイントにある文は下記の通りです。

A nice shop is in this town.

しかし，今回指導をするにあたって，下記の文を使いました。

The nice shop is in this town.

この文は下記の文と同様にいわゆる第 2 文型です。

The nice shop is convenient.

既出の主語を be 動詞以下が説明する文にした方が，据わりが良いので，主語の冠詞は定冠詞よりも不定冠詞が適しています。英語の原則に従って，「新情報が後ろに来る」のです。下記の存在文の構文が必要とされる理由は，まさにそこにあるのです。

There is a nice shop there.

昔話に定番のあの文の構文も，それで説明されます。

Once upon a time, there lived an old man.

4 課のもう一つのポイントは動名詞ですが, 後程, 教科書に登場する to 不定詞と対比させると興味深いです。

to ＋ 動詞の原形	～ing
to 不定詞の名詞用法	動名詞
to 不定詞の形容詞用法	現在分詞
to 不定詞の副詞用法	（分詞構文）

英語でも，動名詞を gerund，現在分詞を the present participle と呼ぶように，区別します。ところが，'to ～'が，前置詞でも to 不定詞でも，「これから」のことを指すような「矢印」のコア・イメージがあるのと同様に，'～ing'にも，動名詞・現在分詞・高校で習う分詞構文に共通するような一つのコア・イメージが存在するのです。それは，「躍動感，臨場感」です。分かりやすく言えば，「床屋の看板の動き」イメージです。

以下に，動詞を目的語にとるときの形で，おおざっぱに分類します。

①動名詞を目的語にとる動詞
mind, enjoy, finish, stop, practice

②to 不定詞の名詞用法を目的にとる動詞
want(「～したい」の意味で), hope

③動名詞も to 不定詞もどちらも目的語としてとるがあまりニュアンスが変わらない動詞
begin, start, like, love

④動名詞も to 不定詞もどちらも目的語としてとるがはっきりとニュアンスが異なる動詞
remember, forger

これらの動詞は，訳もなく機械的に形が与えられている訳ではありません。①～④に共通して，「これから」のことに対しては'to ～'が，床屋の看板のような躍動する臨場感のある動きのイメージが必要とされるものには'～ing'が目的語の動詞の形として必要とされるのです。床屋の看板のようなイメージの動きを静止させるのが finish であり stop なのです。こういった知識は，次の文のような意味をはっきり区別させるのに必要となります。

He stopped smoking.
He stopped (in order) to smoke.

ところで，動詞の名詞化は，英語に限らず，日本語にもあるようなユニヴァーサルな現象なのです。下記に，日本語の名詞化の二例を挙げます。

・丁寧体ー「～ます」＝語幹
・辞書形＋形式名詞＝～の,こと,もの

名詞化しない動詞の目的語は，日本語でも英語でもおかしな文になるのです。

× 君の手を握るたい。
× I want hold your hand.
× 音楽を聞くが好きだ。
× I like listen to music.

5.　発表授業の具体的な流れ

発表題材は能力に応じて変えると良いでしょう。本文は発表用として「手作り教科書 Step 1」で書き換えも可能です。Mini-project の発表もできます。

※Total: (33－ｘ－ｙ)×3＋2ｘ＋ｙ　ｘ:B の人数
(板書例) ≒100－ｘ－2ｙ　　ｙ:C の人数

Groups	団体戦	個人戦	Totals	Results
3	87	40	127	Bronze
6	90	30	120	
2	95	50	145	Silver
4	88	60	148	Gold
1	92	20	112	
5	85	10	95	

単元（題材）の評価基準

観点	単元の評価基準	具体的な評価基準
関心意欲態度	日本の各地域の食文化についての関心・意欲・態度	班での発表活動で A「指導」 B「協力」 C「参加」できる
表現の能力	日本の各地域の食文化についての発表における表現の能力	英語らしいリズムやイントネーションを使って A「表現」 B「暗唱」 C「音読」できる
理解の能力	日本の各地域の食文化についての発表における理解の能力	本文を読んだり，聞いたりして内容を A「要約」 B「把握」 C「理解」できる
言語文化の知識理解	日本の各地域の食文化の発表についての知識・理解	本文に含まれる語彙や文法が A「使用」 B「把握」 C「理解」できる

単元導入と群読発表の５０分授業の展開

	学習活動	留意点・配慮事項	評価内容方法
導入 20分	発音発声 内容理解 要点練習 役割練習 発表準備	★デジタル教科書 ★「手作り教科書」 ※団体戦は分けて群読，個人戦は全部を通読(暗唱)	語彙や文法が理解できる。 強勢や抑揚を使って表現できる。
展開 20分	☆発表Ⅰ [団体戦] 他班評価 ☆発表Ⅱ [個人戦]	英語でキュー出し One for All, All for One 評価基準設定 A:Excellent 3 点 B:Very Good 2 点 C:Good Enough 1	班での発表活動に積極的に参加できる。 他班の発表鑑賞がしっかりでき評価できる。
要約 10分	内容確認 文法要点 振り返り	ワークシート活用	読んだり聞いたりして， 内容を把握